

7病防第1号  
平成7年4月3日  
東京都

-----  
平成7年度 病害虫発生予察特殊報(第1号)

病害虫名 : トマトサビダニ

*Aculops lycopersici*, (MASSEE)  
-----

## 1. 発生経過の確認

平成7年2月、葉が黄褐色になり、茎の表面が灰褐色のえそ症状がみられる施設栽培のトマトが南多摩農業改良普及センターから持ち込まれ、当所で調査したところ、表面に多数のサビダニ類の寄生が認められた。

埼玉県園芸試験場の根本久専門研究員に同定をお願いし、その結果本種であることが明らかになった。

本種は昭和61年に沖縄県で発生が初めて確認され、西日本から東海に発生が拡大し、関東では平成6年10月に埼玉県と神奈川県で発生が確認されている。

現在までのところ、他のトマトほ場では本種の発生は確認されていないが、苗や果実の輸送に伴い発生が拡大することが考えられるので十分な注意が必要である。

## 2. 形態及び生態学的特徴

### (1) 形態

体形はくさび形で成虫の体長は0.15~0.18mmで雄は雌よりやや小さい。

体幅は0.05mm、体色は黄褐色で肉眼での観察は困難である。卵は円形、半透明である。

日本原色植物ダニ図鑑から引用

### (2) 生態

発育の適温は26.5度、湿度は30パーセントと温暖乾燥条件を好む。この条件で卵期間は2日、1齢幼虫期間は1日、2齢幼虫期間は2日、1世代の経過期間は6~7日である。0度以下では越冬できず、施設内で越冬すると考えられる。休眠性は確認されていない。

害虫防除の薬剤散布回数が通常より少ない場合に発生しやすい。

### (3) 寄主植物

トマトのほかナス、ジャガイモ、トウガラシ、タバコ、ペチュニア等のナス科植物に寄生する。

## 3 被害症状

本種はトマトの葉、茎、果実に寄生する。寄生されると、葉は裏面が光沢を帯び、

周辺部が黄褐色になる。多発すると下葉から徐々に枯れ上がる。このため、土壌病害と間違いやすい。また、茎にも寄生して灰褐色となる。寄生された果実は灰褐色になり、果実表面が硬化して細かい亀裂が多数生じサメ肌状となるため商品価値が低下する。

主に施設で発生し、露地では少ない。

#### 4 防除対策

##### (1) 耕種的防除

寄生された株を持ち込まないために既発生地で育苗した苗を導入しない。また育苗時に薬剤防除をする。

本種は衣類等に付着しても移動するので発生圃場での作業は後まわしにする。

多発生した株や発生圃場の収穫残渣は焼却するか埋設する。

本種はナス科雑草にも寄生するので発生した施設周辺の除草を徹底する。

風によっても広がるので風による侵入を防ぐことも必要である。

##### (2) 薬剤防除

本種は初期防除が有効であり、ケルセン乳剤及びモレスタン水和剤でハダニと同時防除ができる。効果がある薬剤としては以下の薬剤があげられる。散布にあたっては葉裏によくかかるように散布する。

薬剤名	倍 率	安全使用基準
ケルセン乳剤 40	1500～2000倍	収穫前日、2回以内
DDVP 75乳剤	1500～2000倍	3日、3回
モレスタン水和剤	1500～2000倍	3日、5回
アディオン乳剤	2000～3000倍	前日、3回
ベンセコブフロアブル	800～1000倍	前日、2回

DDVP、アディオン、ベンセコブはマルハナバチに対する影響が強いので散布にあたっては注意する。